カタリネラー七足の鉄のくつと三本のつえ　イタリア

昔むかし、あるところに、三人の姉妹がありました。末の娘はカタリネラといいました。三人は、いつも、インキュディーネ山のふもとにまきを拾いに行きました。すると、山の上のほうから、

「カタリネラ、もっと上へあがっておいで」という声が聞こえてくるのでした。

ある日のこと、また声が聞こえてきたので、カタリネラは、姉さんたちにいいました。

「ねえ、登っていきましょうよ」

「まあ、そんなことしたら、わたしたち、殺されてしまうわ」と、姉さんたちはいいました。

「でも、どうしてわたしをよぶのか、知りたいわ」

「だめよ。まきを拾って帰りましょう」

けれども、カタリネラは、ひとり、山を登っていきました。登るにつれて、声は大きくなっていきました。カタリネラは、かまわずどんどん登っていきました。一日じゅう登り続けて、てっぺんまで来ると、ひとりの庭師に会いました。

「カタリネラ、かわいそうに。おまえは、本当に登ってきたんだね」

庭師はそういって、カタリネラを、見たこともないようなりっぱなお城に連れていきました。美しい大広間には、たくさんの石の彫刻がならんでいました。それは、魔法で石にされた人たちの像でした。そこへ、お城の番人が現れて言いました。

「おまえは、今から、わたしがいうとおりのことをするのだ。さもなければ、あの者たちと同じように石となり、永遠に言葉を失い、目は閉じられ、死の世界に行かねばならない」

「いったい何をすればいいの」

「あそこに立っている王子を生き返らせるのだ。そうすれば、おまえは、王子の妃となり、城のすべての宝を手に入れることができるだろう」

「どうすれば王子さまは生き返るのかしら」

「それには、村から村、城から城へと、道の続く限り歩かなくてはならない。そして七足の鉄のくつをはきつぶし、木のつえで戸をたたいて三本のつえをすりへらしたとき、ここへ帰ってくるのだ」

カタリネラは、鉄のくつをはいて、つえを持って旅に出ました。

三十日の昼と夜、カタリネラは、休まず歩き続けました。やがて、ある暗い森に入っていくと、遠くに小さな明かりが見えました。行ってみると、つたと黒いちごのしげみにおおわれた、こわれかけた小屋がありました。

カタリネラが木のつえで戸をたたくと、ひざまで届く長い白いひげを生やしたおじいさんが出てきました。

「今夜の泊まるところをさがしています」と、カタリネラがたのむと、おじいさんはいいました。

「お入り、娘さん。わしはもう百年も人間というものに会ったことがないよ。あんたはどこへ行くんだね」

「わたしは、七足の鉄のくつをはきつぶし、三本のつえをすりへらすまで、世界じゅうを歩きまわらなくてはならないのです」

カタリネラは、そういって、これまでのことを話しました。

あくる朝、カタリネラが出かけようとすると、おじいさんはいいました。

「あんたに、なしをひとつあげよう。このなしは、きれいな音楽をかなでてくれる。王子の父親の城の前を通ったら、『なしよ、なし。わたしをわすれないで』といいなさい。すぐに、土の中から城がうかびあがって来て、その中に王子がいるから」
　カタリネラは、なしを受けとると、お礼をいって旅を続けました。いくつもの川を越え、いくつもの山を越えて行きました。
　草原に小さな小屋が立っていて、貧しい男が住んでいました。カタリネラが、
「すみませんが、休ませてもらえませんか」とたのむと、男はいいました。
「わしはもう百年も人間というものに会ったことがないよ。あんたはどこへ行くんだね」
「わたしは、七足の鉄のくつをはきつぶし、三本のつえをすりへらすまで、世界じゅうを歩きまわらなくてはならないのです」
カタリネラは、これまでのことを話しました。
　あくる朝、カタリネラが出かけようとすると、男はいいました。
「あんたに、くるみをひとつあげよう。このくるみは、きれいな歌を歌ってくれる。『くるみよ、くるみ。わたしをわすれないで』というと、土の中から水車がうかびあがってきて、ひとりでに好きなだけ粉を出してくれる」
　カタリネラは、お礼をいって、また旅を続けました。
　一年歩き続けると、年とった隠者に会いました。
「わしはもう百年も人間というものに会ったことがないよ。あんたはどこへ行くんだね」
「わたしは、七足の鉄のくつをはきつぶし、三本のつえをすりへらすまで、世界じゅうを歩きまわらなくてはならないのです」
　隠者はいいました。
「あんたに、アーモンドをひとつあげよう。このアーモンドは、きれいな音楽をかなでてくれる。『アーモンドよ、アーモンド。わたしをわすれないで』というと、死人でもしゃべらせたり踊らせたりできるのだ」
　それからまた、長い年月歩き続けて、とうとう魔法にかけられた王子の父親が王として治めている国にやって来ました。カタリネラが町を歩いていると、お弔いの行列に出くわしました。カタリネラは、アーモンドを取りだして、
「アーモンドよ、アーモンド。わたしをわすれないで」ととなえました。すると、美しい音楽が鳴り始め、死んだ人が生き返ってしゃべり始め、踊り出しました。人びとはたいそうおどろき、喜びました。王さまが、カタリネラをお城によんで、
「おまえのアーモンドを売ってくれないか」といいました。カタリネラは、
「金をいただいても、銀をいただいても、アーモンドは売りません」と答えました。
「では、この町と城をやろう」
「たとえ王国ぜんぶをいただいても、アーモンドは売りません」
王さまはあきらめるほかありませんでした。
　夜になると、カタリネラは、お城の前に出かけて行って、くるみに向かっていいました。
「くるみよ、くるみ。わたしをわすれないで」
すると、美しい歌声がひびき始めました。王さまがまどからのぞいてみると、お城の前にすばらしい水車が立っていて、休みなく回っていました。
　王さまは、カタリネラを見て、
「どうか、おまえのくるみを売ってくれないか」といいました。
「いいえ、けっして売りません」と、カタリネラが答えると、王さまは、

「ではせめて、もうしばらく、美しい歌を聞かせてくれないか」といいました。
そこで、カタリネラは、なしをとり出して、
「なしよ、なし。わたしをわすれないで」といいました。すぐに、美しい音楽が流れ始めました。そして、土の中からお城がうかびあがって来て、大広間に、石になった王子の像が立っていました。カタリネラが、なしをふところにしまうと、音楽は止み、王子もろともお城は消え去りました。王さまは、
「おまえのなしを売ってくれ。おまえの望む物すべてと取りかえよう。わしのすべての宝、わしの命をやってもよい」とさけびました。
「いいえ、だめです。王子さまを見つけるには、あなたは遠くインキュディーネ山まで行かなくてはなりません。さあ、馬車に乗ってお出かけください」
王さまは、
「おまえもいっしょに馬車に乗りなさい」といいましたが、カタリネラは、
「わたしは、歩いて行かねばなりません。鉄のくつをあと一足、はきつぶさなくてはならないのです。インキュディーネ山のふもとで待っていてください」といいました。
王さまは馬車に乗って出かけ、カタリネラは、再び歩きだしました。
長い旅を続け、とうとう、最後の鉄のくつがすり切れて、最後のつえがすりへりました。そのとたん、カタリネラは、インキュディーネ山のふもとにいました。
王さまが待っていました。カタリネラは、王さまに、ここで待っているようにといって、ひとりで山を登って行きました。
カタリネラが登って行くと、ひと足ごとに、森の木々は歌い始め、石たちは踊り始め、動物たちはしゃべりはじめました。てっぺんまで来ると、お城の番人が出て来ていいました。
「おまえは、七足の鉄のくつをはきつぶし、三本のつえをすりへらしたのだな」
「ええ。そして、王子さまを生き返らせるために帰って来ました」
「おまえは、先に、石にされたほかの者たちを、生き返らせなくてはならない」
お城の番人はそういって、鉢に水を入れて持って来ました。カタリネラは、すりへったつえのかけらを水にひたして、かけらで、そばにあった石の像にさわっていいました。
「この水で、わたしはあなたを生き返らせる」
たちまち石の像は人間になって動き始めました。カタリネラは、ひとつひとつの石の像を、つえのかけらでさわって行きました。さいごに、王子の所まで来ました。
「この水で、わたしはあなたを生き返らせる」
つえのかけらがさわったとたん、王子は目を覚ましました。
その日のうちに結婚のお祝いが開かれました。王子といっしょに石にされた人たちも、まねかれました。みんなは、生きていることを喜びながら、食べたり飲んだりしました。
三日間というもの、国じゅうに、美しい音楽が鳴りひびきました。なしとくるみとアーモンドが、国じゅうのおとなと子どもたちを喜ばせるためにかなでてくれたのでした。

原話：『世界の民話１３地中海』小澤俊夫編訳／ぎょうせい
再話：村上郁